

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(美術)  
／武市 勝

## ■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

## Ⅰ. 学長の定める重点目標

## Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

## 1. 目標・計画

22年度の総括については別の書類で提出しているが、この質問に対しては、教科専門と教職専門の2点から記すことにする。

- ・教科専門(絵画特別演習Ⅱ、版画制作演習) これまでの方法は、学部・大学院とも、「専門知識、基本技法の修得を優先させるため、時間のかかる大作を制限し、小作品の制作を軸に指導」してきたが、昨年度の反省として、全体に意欲、覇気のない空気が感じられた。これを改善するため、今年度は再度、作品枠に制限を設けず、多様な結果が出ることを想定しようと考えている。
- ・教職専門(図画工作ⅠA) 学校現場での図画工作実技能力の育成を目的とした「グレードシステム」に基づいた実践を行っている。具体的には、学校現場で図画工作担当教師として、「絵の描き方」を知っており、実際に描けること、及び子供の絵の指導・評価ができること、である。基本的には問題は出ておらず、他大学と比較してもこのやり方がベストと感じている。

ただ、グレードの問題として提出への区切りをつけないため、提出に偏りができる。今年度以後はこの偏りを避けるため、提出日程の限度を周知させようと考えている。

## 2. 点検・評価

- ・教科専門・総括として、大学院に関しては現状の方向でいい。しかし、学生には自分の学んでいる授業が、基礎の上に立ち、現代でも先端的な内容だと感じられることでモチベーションが増すということがわかった。教師側の意向としてもその方向に満足を感じている。したがって次年度については、現状の内容に加えて、さらに現代的な問題を考えさせたいと思っている。具体的には、筆者が行っている海外での版画調査とからむが、コラグラフ技法の発展作品の提示である。
- 学部についても同様であるが、こちらは基礎であり授業の方向が異なる。限られた少ない時間数の中でできるだけ基本的な版画技法を紹介し、定着をはかることを目的とする。このため大作品の制作はとりあげない。今年度以後の学生に対しては、卒業研究の対象から外れるので次年度はいかにモチベーションを作るかが問題となろう。
- ・教職専門・学生のアンケート結果は比較的好評であり、地味な素描技術の習得についても熱心に取り組んでくれたことを示していた。「黒板の字が小さい」などの指摘はあったが、基本的にこちらも現状の方向でいいと確信している。

## Ⅱ. 分野別

## Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

## 1. 目標・計画

- ・クラス担任 美術コース3年生に対しての、適切なゼミ分け・3年次合宿研修・主免教育実習での指導
- ・グレード指導 初等教育教員を目指す学生のための自学自習を基本にした素描・平面表現を支援する。
- ・就職支援 教員採用試験受験予定者に対しての実技講座での指導を行う
- ・ゼミ 研究留学生に対する版画の専門指導を開始する

## 2. 点検・評価

・クラス担任 ゼミ分けは完了したが、1名秋口より不登校状態になった学生がいた。退職予定教員のゼミだったこともあり、生活指導を誰がすべきかで対応が遅れたが、結局筆者が自宅訪問し、学生と話し合っ解決に向かっている。

・グレード指導 長期履修大学院生の急激な増加のため、次年度は嘱託講師の追加が決定したので、グレード指導もより広範な体制になる。これがうまく回転すればグレードの検討も含めて学生の実技能力の養成はいい循環が期待できると思われる。万一それが期待できない場合は、カリキュラム上での授業移動を行い、現状より受講者数を減らす態勢を考える必要がある。

・就職支援 今年度感じたのは受講者数の増加である。30名以上にすれば1時間では個別指導はできないため、回数を増やす必要がある。

・ゼミ 私費研究留学生は無事大学院に合格した。また近畿大学より版画志望の学生が1名合格した。在職期間が少ないので指導が不安であるが、学生は了解済みである。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

- ①写真製版シルクスクリンによる多版多色制作の継続研究
- ②東南アジアにおける版画教育の現状調査の継続
- ③コラグラフ技法の整理とまとめ
- ④欧州における現代版画の動向調査研究

## 2. 点検・評価

- ①今年度は展覧会が多かった。個展一回グループ展三回である。次年度の夏もグループ展を予定している。すべてシルクスクリン写真製版の発表である。
- ②外務省の通達では比較的安全と思われる国や都市はほぼ訪問し、調査した。今年度はとくに台北市での多くの大学教授や気鋭の版画家と交流を深めることができたのは収穫と思っている。また、ハノイや香港での美術ディーラーと会い、情報を得ることができたのも充実していた。
- ③コラグラフ技法は技法書としてまとめる予定が遅れているが、ライフワークとしても続けて行う所存である。今年度の海外出張時に、香港の画廊で先進的な作品「メディウム剥がし刷り」を目にし、これをさらに発展させて、技法に付け加えたいと考えている。
- ④今年度は無理だったが、次年度は再度欧州訪問できる日程を組みたいと考えている。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

- ・大学院教務委員会副委員長として委員会に参加する
- ・予算財務委員として委員会に参加する
- ・その他、必要に応じて委員会、ワーキングチームに参加する

## 2. 点検・評価

- ・大学院教務委員会「教育実践フィールド研究」について、専門部会主査として検討し、各コース・専攻で扱っている現状について、担当者または教務委員などを通じてヒヤリングを行い、全体とりまとめの結果を1月の委員会で報告した。一部の反論はあったが、現状ではできるだけ運用は柔軟に、各コースの実情に応じて内容を組み立てることが重要という結論に対してはおおむね了解が得られた。
- ・予算財務委員として出席し、課題については4部部会で協議検討した。
- ・その他
- ①美術理論・美術史担当教員選考は12月の人事委員会で報告し、その後決定された。
- ②美術科教育担当教員の配置換え選考についても終了、決定された。
- ③インターンシップとして、鳴門市内の小中学校への訪問も無事に終了した。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

### 1. 目標・計画

・附属との関係については、院教務の業務でもあるが、「教育実践カリキュラム」のつなぎをつとめることになると思われる。また、クラス担任学生の主免教育実習年であるので、何度か附属に足を運び、授業指導などに関わると予測される。

・地域社会との連携については、今年度も阿南市文化についての関係者と適宜会合を持ち、提言その他の実践を行う予定である。また、徳島県内を中心に活動する「徳島版画」代表を継続、活動を行う。

・国際交流については、現在研究留学生を担当している。また、直接的な関連ではないが、現在行っているアジアを軸にした版画教育の調査で、代表的美術大学を訪問し、本学との交流に相応しいかの検討も行っている。

### 2. 点検・評価

・附属との連携については、今年度はかなり少なかった。教育実践フィールド研究での接点程度にとどまった。機会はいくつかあったが、授業、会議、出張など、その他の公務と重なってしまった。次年度は心がけておきたい。

・重複するが、「徳島版画」の会を通じての震災チャリティ展、例年の徳島市内でのグループ展、個展、さらに日本美術家連盟四国支部展などの参加を通じて地域社会との連携をはかった。

・1月に台北芸術大学、台南師範大学を訪問し、担当教員などと意見交換、資料収集を行った。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

それなりに充実していたが、かなり多忙な1年であった。正直言ってこんな年が毎年続くのは大変だと感じている。公務と研究、さらに学生支援が重なったためである。また今年度のゼミは留学生1名にとどまったが、来年は大学院生2名になる。本学への貢献とは、今年度のような委員会副委員長としての直接貢献に限らず、研究活動の蓄積もあると考える。形として他者が見えるものだけを業績とするのは、形式だけが整って中身の無いスケールの小さい研究しか残らない気がする。新構想大学の宿命でそれでよいとするならば現代の文化を背負う研究者が育つかどうか疑問である。